

英 語

●平成 30 年度 of 取組の方向性

中学校、高校ともに、英語 4 技能のバランスのとれた習得が目標として掲げられており、特に「話す」「書く」において技能を高めることが求められている。附属坂出中学校、坂出高校、丸亀高校において、有効な言語活動例やパフォーマンステスト例の事例を 3 校が持ち寄り、英語 4 技能を指導するにあたっての円滑な接続について研究する。

平成 30 年 10 月 24 日（水）坂出高校 授業公開

研究の概要	
<ul style="list-style-type: none"> ○ 1 年生 コミュニケーション英語 I “Food Bank” <ul style="list-style-type: none"> ・ 貧しい人たちに食料を与える活動をしている NPO である「FOOD BANK」について ・ 本時はセクション後のまとめ ○ 言語活動についての意見交換 	
感想など	課題点など
<ul style="list-style-type: none"> ・ウォーミングアップの活動が時事的な視点を取り入れたものであったところが良かった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・新学習指導要領にある「多くの支援を活用すれば」の支援とは何かを共有したい。 ・ウォーミングアップの活動が、全体の活動と内容的につながる方がよい。

平成 31 年 1 月 28 日（月）附属坂出中学校 授業公開

研究の概要	
<ul style="list-style-type: none"> ○ 3 年生 Special Project のまとめ活動「おすすめの旅プランを紹介する」 <ul style="list-style-type: none"> ・ 4～5 人の小グループで自分のプランの発表をさせる。 ○ 発表の活動やレッシンプランについて意見交換 	
感想など	課題点など
<ul style="list-style-type: none"> ・発表するまでのスモールステップが細かく設定され、自信をつけてクラスで発表できるような工夫がされていた。 ・2 年前の生徒の同様の活動をビデオで鑑賞させ、それを模範として活動に臨ませており、よいモデルとなっていた。 ・授業を生徒が受けやすくなるように留意点がレッシンプランにも示されていた。(Q&A で入りやすくする。小グループの活動で自信を付けさせる。発表を聞く側の姿勢にも注意を促す等) ・単元の内容に沿った授業時間割ができていた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業が教科書を一通り終えた後で行われており、内容が目標に前面に出たものとなった。逆に英語として何を評価するのが明確でなかった。 ・発表とその発表を聞くことがメインで、新学習指導要領で盛り込まれる、会話の「やりとり」の活動を確保できていなかった。質問班を予め準備しておけば、より良いものになった。 ・先輩の様子のビデオの再生が 1 回であり、模範とするべき点が生徒に完全に伝わってなかった。

研究の概要	
<ul style="list-style-type: none"> ○ 2 年生 英語表現Ⅱの「英語の公用語化についての賛否」 <ul style="list-style-type: none"> ・ 日本企業の英語社会公用語化についての賛否を述べさせようとするもの ・ 文法項目は仮定法 ○ 発表の活動やレッシンプランについて意見交換 	
感想など	課題点など
<ul style="list-style-type: none"> ・ ウォーミングアップが、もし「100 万円あれば」というテーマで仮定法を使って文を作成するといった身近なものであり、生徒たちは楽しんで行っていた。 ・ シャドーイング、ペア活動等を取り入れ、学習項目の確実な定着を目指していた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ テーマ「英語の公用語化についての賛否」について考える時間がもっとあった方がよい。 ・ 文法項目の学習に偏っており、どのように社会につながっているかという視点を授業の構成に盛り込むことが望まれる。 ・ 日本企業の英語社会公用語化についての賛否を述べさせるという目標までたどり着けず、授業単体としては、文法項目を教科書どおりに学習させたものとなった。

●令和元年度の取組の方向性

<p>昨年度の研究においては、中学校、高校それぞれの授業を参観することで、言語活動の取組方を中心に意見を交換し、それぞれの視点から改善方法を模索した。</p> <p>今年度は新学習指導要領に備えるため、中学校、高校がどのような指導をすることが汎用的な資質・能力を育成するのに効果的かについて研究したい。4 技能のバランスのよい定着を目標にしていることは中学校、高校ともに共通で、なかでもリスニングについては、令和 2 年度の大学入学共通テストから配点が高くなるため、多くの学校がその対策を求められている。</p> <p>そこで、限られた授業時間の中でリスニングの力をつけるには、日々の授業の中でどのような工夫ができるかを研究テーマとし、さまざまな活動を取り入れた授業を実践し、意見を出し合いたい。</p>
--

令和元年 8 月 22 日（木）中・高研究協議

研究の概要	
<ul style="list-style-type: none"> ○ 研究協議 <ul style="list-style-type: none"> ・ 丸亀高校 1 年生対象で、大学共通テストの試行テストのリスニング問題を解かせ、その結果について中学校と高校とで協議。 ・ どのような力をつけていくことが必要かを確認し、そのためにどのような活動を取り入れていくことができるかについての意見交換を行った。 	
主な意見など	課題点など
<ul style="list-style-type: none"> ・ 中学においては習った単語でリスニングするが、高校においては習っていない単語は授業でたくさん出る。単語を知らないことは理由にならない。「構文 150」等家庭学習用のワー 	<ul style="list-style-type: none"> ・ リスニングに割ける時間がない。2 次試験はセンターだけでは足りない。文法、長文に比べるとやや落ちる。 ・ 大量に読む力、速く読む力に構文も必要。

<p>クが難しい。</p> <ul style="list-style-type: none"> リスニングは中学校の段階では個人差が大きい。 リスニングのテキスト作りに困っている。 A L Tの活用は、プレゼン、ディベート、エッセイの書き方等、2、3年生で活用している。英作文の添削が中心である。 リスニングパイロットは毎年使い捨てになる。実力テストでリスニングを多めにしている。1、2年の授業においても、量、質を増やしている。 音と文字の乖離を埋める手段が必要。 試行テストの第1のBの間1の平均点が低かった。（「He got a phone」を「光」と聞いた生徒が多かった） 中学校でもこのような聞き取り違いの実例を蓄積し、高校での指導につなげることができればよい。 中学校は素直な問題が多い。1時間全部リスニングでなくてもよい。 	<p>自分もリスニングを家で行ってみようかという工夫ができたらしい。</p> <ul style="list-style-type: none"> リスニングは実技なので繰り返ししなければいけないが、聞かせ方にバリエーションを持たせる等の工夫が難しく単調になりがちで、教師がたくさん仕掛けを作ることができないため、生徒もなかなか取り組みず、リスニングの優先順位が低くなる。 モニタリングができないので、一人一人のチェックができず、修正させることができない。パフォーマンステストでも、カタカナみたいな表現が出てくる。 生徒は、オウム返しはできるが、フレーズになると言えなくなる。意味を考えた表現ができていない。 リスニングの活動を単独のものとしてせず、音読指導等とも合わせて進めて行くことが効果的であることを確認した。
--	--

令和元年11月12日（火）丸亀高校 授業公開

研究の概要	
<ul style="list-style-type: none"> ○ 1年生 コミュニケーション英語 I <ul style="list-style-type: none"> 発音する際の舌や唇の様子を動画やアニメーションで示した。 生徒同士がチェックし合う取組をしている。 教科書音声CDは全員に持たせている。 「まなボード（各班1つのホワイトボード）」にイラストを描くことで、英文を正しく理解しているかの確認を行う。 ○ 本時のねらい等 <ul style="list-style-type: none"> 「文字を読んで分かる」も大切だが「聞いて分かる」を指導していきたい。 ○ 「リスニング力をつける指導について」の意見交換 	
感想など	課題点など
<ul style="list-style-type: none"> 発音する際の舌や唇の様子が動画やアニメーションで示され、生徒は具体的にイメージして発音練習を行っていた。 動機付けを行った後、ディクテーションを取り入れており、効果的であった。 教科書付属のCDだけでなく、A L Tが吹き込んだ英文を聞くことで、イギリス英語にも 	<ul style="list-style-type: none"> タブレットやプロジェクターを効果的に使用していたが、より見やすくする工夫があればさらによいだろう。 ディクテーションでは is cold (正解 is called) や take it (正解 take in) などの誤答が目立った。文法の要素や、文脈から答えを推測させることも指導してはどうか。

<p>触れることができた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ディクテーションした後に、英文や語句の意味を要所で確認し、理解を確かめることが大切なのではないか。 教科書を見るとかなり英文が難しいようだ。中3から高1のギャップが心配。ついていけないのだろうか。 	<ul style="list-style-type: none"> 全国学力学習状況調査の結果では、附属坂出中学の生徒は、まとまりのある英文を聞き取るのが苦手な傾向がある。発音練習も大切だが、リスニング練習を難しいと思わせないような工夫が中学校でも求められている。 該当クラスのプレテストでのリスニングテストの結果を分析した上で、弱いところをディクテーションの空欄にした。ALTのBritishアクセントに慣れさせるのもよい。これからはアメリカ英語だけでなく、いろいろな英語に触れさせるべきである。
---	--



ディクテーションの様子



話し合いの様子

令和元年 12月18日（水）丸亀高校 成果発表会

研究の概要	
<ul style="list-style-type: none"> ○ 1年生 コミュニケーション英語 I 「2020年東京オリンピック・パラリンピック招致に向けたプレゼンテーションの役割」について <ul style="list-style-type: none"> ・タブレットを使ったウォームアップ、音声のみでのリスニング、画像を見ながらのリスニング、“まなボード”を使っでのグループでの話し合い ○ 本時のねらい等（指導者より） <ul style="list-style-type: none"> ・今年の夏にバカロレア教育に関する研修を受講し、そこで知った、kahoot（クイズ作成無料ソフト）や、付箋を使う活動を今回取り入れた。 ・佐藤真海さんのプレゼンスピーチを題材に選んだのは、生徒からの「まとまりのある長めの英語を聴くのが苦手」という声を受け、そこを強化したいと思ったからだ。ネイティブスピーカーのような流暢さはないが、伝えたいという姿勢を感じ取って、生徒も自信をもって話すきっかけになれば、という思いから採用した。 ○ 中高接続を中心に、現在の英語教育の流れについて意見交換 	
感想など	課題点など
<ul style="list-style-type: none"> ・ICTが随所で取り入れられており、リスニングに効果的であった。 ・付箋に記入した英語を、グループ内で教え合 	<ul style="list-style-type: none"> ・「対話的」な活動をする上で、「話し合う必要性」を中学校では大切にしている。話し合った結果、新たな気づきがあった、考えが広が

い、書き直していた姿が見られた。付箋に日本語で記入している生徒からも、意欲が見取れるので、よい手立てだ。

- ・中学校でのプレゼン（スピーチ）では、まず挨拶から始め、内容をどのような構成にするのかということをお教えている。丸亀高校でいう「よいスピーチ」とはどのような要素が含まれているのか。
- ・バカロレア教育の研修での内容(kahoot クイズ作成ソフト)が取り入れられており、生徒たちも惹きつけられていた。
- ・小学校で英語の授業が始まることで、今後、中学校、高校に入学する生徒の英語レベルは高くなるだろう。小中高の連携が望まれる。

った、など「話し合う価値」があれば、よい対話になる。

- ・リスニング力のみを育成するというよりは、4技能が関連しあって高まっていくと思うので、スピーチを聞き取った後に、スクリプトを読んで、さらに深い学びがあった上で、タイトルを考えさせてもよかったのではないかと。
- ・これからは「クリティカル・シンキング」の力を養うことが重要。高校卒業時にあるべき姿を小・中・高で共有し、そこを目指してスムーズな教育の接続がなされるべきである。



Kahoot の様子



発声練習



質問タイム



班での協議

●成果と課題

英語科においては、教育研究会英語部会が主催の中学校・高校が合同で行う研究大会があり、中学校・高校それぞれの授業を参観する機会があるが、授業内容について協議する機会はまだ少ない。

この研究において授業について協議をし、それぞれの視点から意見交換できたことは、小学校でも英語が教科として導入され、小・中・高の連携が求められていく中、中学校と高校が連携する機会として意義があった。小学校での教科としての英語が始まれば、中学校での指導内容が変わり、その後、高校での指導内容も変わってくることになる。よって、中学校と高校のみならず、小・中・高の連携が必須となるので、これからどのような形でそれが実施できるか模索する必要がある。